２０１０年度　修士論文

スポーツ鑑賞における解説内容の違いが態度・行動意図に与える影響
－大学バレエクラスを題材に－

The influence of sport appreciation with various types of commentary on attitude and behavioral intention : a case of university ballet class.

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻　スポーツビジネス研究領域

５００９A０５５－２

醍醐　笑部

Daigo, Ebe

研究指導教員：　木村和彦　教授

第１章　序論　……………………………………………………………………p.1
第１節　　緒言
第１項　スポーツ参与形態の多様化と研究の潮流
第２項　学校体育におけるスポーツ鑑賞の必要性
第２節　　研究の目的
第３節　　用語の説明
第１項　スポーツ鑑賞
第２項　バレエ

第２章　先行研究の検討　………………………………………………………p.6
第１節　　「するスポーツ」と「みるスポーツ」に関する研究
第１項　直接スポーツ参与の視点から
第２項　間接スポーツ参与の視点から
第３項　舞踊の実践と鑑賞の視点から
第４項　まとめ
第２節　　映像認知に関する研究
第１項　映像認知プロセスについて
第２項　体育・スポーツに関する映像について
第３節　　態度・行動意図に関する研究

第３章　研究方法　………………………………………………………………p.13
第１節　　研究枠組みの提示
第２節　　研究の限界

第４章　鑑賞者における態度・行動意図の変容　………………………p.15
第１節　　予備調査
第１項　調査概要
第２項　分析方法
第３項　調査項目
第４項　結果
第５項　考察
第２節　　DVD コンテンツのプロダクト構造
第１項　調査概要
第２項　分析方法
第３項　調査項目
第４項　結果及び考察

第３節　　　本調査
第１項　調査概要
第２項　分析方法
第３項　調査項目
第４項　結果及び考察

第５章　結論 ……………………………………………………………………p.39
第１節　　　まとめ
第２節　　　今後の課題

引用・参考文献 …………………………………………………………………p.43

第１章　序論

第１節　緒言

第１項　スポーツ参与形態の多様化と研究の潮流

「生涯スポーツ」という言葉が浸透した今日では、人々は「する」だけでなく「みる」「支える」「話す」といった多様な形でスポーツライフスタイルを築いている。日本人のスポーツに関する価値意識が、変化と多様化の傾向をたどっていると言えるだろう。スポーツに関しての価値意識が多様化してきていることは、スポーツが日常における生活や生涯の価値と深くかかわり始めたことを意味し、変化した多様なスポーツの楽しみ方は、余暇生活の中におけるスポーツの位置づけの重要性を表している。具体的には、スポーツをすることだけでなく、観戦したり、視聴したり、読んだり、会話したり、またスポーツ活動の運営に携わり支えるといった多様な行動が多くの人の中で複数みられるようになっている。このような様々なスポーツライフスタイルとのかかわりから生まれてくる楽しさ、つまり「行う楽しさ」だけでなく、「見る楽しさ」「支える楽しさ」「読む楽しさ」「知る楽しさ」がスポーツの魅力ではないかと考えることが出来る（小泉ら､2004)。

日本のスポーツ事情を調査してきた笹川スポーツ財団は、「スポーツライフ白書」において、スポーツとの関わりを「する」「観る」「視る」「読む」「支える」「話す」という６つのカテゴリーで設定している。各参与形態について、具体的体的な実施状況と今後の希望について調査し、報告している。スタジアムなどでの競技場でスポーツ観戦をした成人の数が、年々の増加していることからも、スポーツをみることによって楽しもうとする「みるスポーツ」は「するスポーツ」とともに国民生活に定着しているようだ。

しかし、スポーツ科学研究においてはそれらの参与形態が個々に取り上げられ、関係性や影響について触れたものは少ない。スポーツにおける「する」「みる」の両側面を扱った数少ない研究では、直接スタジアムなどでスポーツを観戦することの有無、スポーツ経験の有無を問うものであり、その質（どのような「みる」経験であったか）について設定されているものは皆無であった。

従来の研究は、プログラム参加者や観戦者、ボランティア参加者といった集団を個別に対象としてきたが、個人の中ではこうした「する」「みる」「支える」が独立しているわけではない。なかでも中心的な参与形態と考えられる「する」「みる」だが、「するスポーツ」

が「みるスポーツ」（特にスタジアムなどでのスポーツ観戦）へとつながることは実証されているものの、その逆については先験的に述べられるにとどまっている。

人々が素晴らしいものを見て「やってみたい」と思うような事は、研究として実証されていない。どのように見せるか、見せ方に関する科学的研究によって、「するスポーツ」（参加者サービス）を扱う経営体にとっては、そのきっかけとして「みるスポーツ」の提供の仕方を提示し、「みるスポーツ」（観戦者サービス・メディアスポーツサービス）を扱う経営体にとっては、一時的なスポーツサービスにとどまらずスポーツ参加市場を拡大することを明確に示すことが出来るだろう。

第２項　学校教育におけるスポーツ鑑賞の必要性

小・中・高校生という青少年期においてスポーツ参加経験のあるものは成人後においてもスポーツに参加する傾向にあることが報告されている。そのため、生涯スポーツの担い手として学校体育の重要性が唱えられるようになり、「する」に限らない授業の在り方が議論されている（小泉ら、2004)。体育のねらいに「生涯スポーツ」という言葉があげられてずいぶん経つが、指導要領では「合理的な実践」が強調され、まだまだ「するスポーツ」が主な学習内容であるのが現実ではないだろうか。

平成 12 年、当時の有馬文部大臣は教育改革の動向の中で「スポーツは実際に体を動かすことにとどまらず、見て楽しむなど多様な形で親しみ楽しむことが出来るものであり（略)」と述べているように、教育の中でも体力増進を主としてきた体育授業に、生涯スポーツを見据えた変化が求められている。

体育科教育の分野では、友添(2004)が、学校体育の授業づくりについて触れ、『スポーツはそれ自体で,きわめて豊かな学習の可能性,つまりラーンナビリティを持っています.このことは逆に，スポーツは子供達にとって，多様な楽しさを秘めているということでもあるのです．スポーツとの多様なかかわりから生まれてくる楽しさ，つまり「行う楽しさ」だけではなく，「見る楽しさ」「支える楽しさ」「知る，調べる楽しさ」，このような多様な楽しさがスポーツの魅力である．』とし、上原(2002)は『スポーツ体験の違いから今後ますます開くであろう生徒の個人差を考えるとき、「するスポーツ」だけでなく「見るスポーツ」を内容とする体育は、生徒ひとりひとりのスポーツへの興味・関心を喚起する事であろう』と述べている。

友添(2004)や上原（2002)が述べた指摘がなされるなか、平成 20 年 3 月告示の新学習指

導要領の改訂に基づき、保健体育科では、『子供たちの豊かな心と健やかな体をはぐくむために授業時間数を増やすとともに、中学1･2年生において「武道」「ダンス」を男女必修で履修させること』とする改訂がなされた。施行は平成21年度からであり、平成23年までを移行期間としている。下記に示した学習指導要領の抜粋ではダンスの授業において「する」側面が強調されているように感じられるかもしれない。しかし、体育教育全体の流れとして「みる」側面を含めたさまざまな参与形態を考慮し、指導がなされることが期待されているため、ダンス授業においても鑑賞の場を設定することは今後必要となってくるだろう。

表1-1　新学習指導要領におけるダンス

G ダンス

(1) 次の運動について，感じを込めて踊ったりみんなで踊ったりする楽しさや喜びを味わい，イメージをとらえた表現や踊りを通した交流ができるようにする。

ア 創作ダンスでは，多様なテーマから表したいイメージをとらえ，動きに変化を付けて即興的に表現したり，変化のあるひとまとまりの表現にしたりして踊ること。

イ フォークダンスでは，踊り方の特徴をとらえ，音楽に合わせて特徴的なステップや動きで踊ること。

ウ 現代的なリズムのダンスでは，リズムの特徴をとらえ，変化のある動きを組み合わせて，リズムに乗って全身で踊ること。

(2) ダンスに積極的に取り組むとともに，よさを認め合おうとすること，分担した役割を果たそうとすることなどや，健康・安全に気を配ることができるようにする。

(3) ダンスの特性，踊りの由来と表現の仕方，関連して高まる体力などを理解し，課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。

（新学習指導要領　第二章　各教科　第7節保健体育より抜粋）

第２節　研究目的

より良いスポーツへの態度や行動意図を持つようになるには、ただ試合を見せるだけでなく、「どのようにみせるか」「何を見せるか」「見せ方」が重要なのではないかと考えた。本研究では、クラシックバレエ（ここでは大学保健体育バレエ授業にて研究を行った）を題材として取り上げ、解説のついたＤＶＤ鑑賞を行う。解説内容に変化をつけ、どのような解説内容が、その後の態度・行動意図を高めるかについて明らかにする。

第３節　用語の説明

第１項　スポーツ鑑賞

佐伯（1999）は、観戦文化論として、「スポーツ観戦を見直すことにより社会文化的意味のより深い解明へと向かわせる可能性」を指摘している。スポーツ観戦を、単なるスポーツを「みる」行為ではなく、生涯スポーツにつなげるためには、スポーツ観戦そのものが文化的行為となる必要があるだろう。

また、大辞林において鑑賞とは「芸術作品を味わい理解すること」とある。一方、観戦とは「戦いの様子を視察すること」「試合を見物すること」となっている。したがって、本研究における「スポーツ鑑賞」は、直接スタジアム等へ出向き試合をみる、テレビなど媒体を通してみる「スポーツ観戦」とは多少異なるものとして使用した。スポーツ観戦の「みる」行為そのものを指すのではなく、「みる」と同時にそこに存在する背景や物語性も含め「楽しむ」行為、「スポーツをみることによって、その戦いの様子だけでなく、魅力を味わい、理解する」行為であると定義する。

第２項　バレエ

本研究のではクラシックバレエをバレエと表記している。DVD コンテンツとしてクラッシックバレエを採用した。クラッシックバレエとは、ダンス・バレエのジャンルの一つである。総合芸術と呼ばれ、「多くの独舞・群舞からなる無歌詞舞踊劇」と定義され、舞踊における中心的、根本的な領域と考えられている。16 世紀から 17 世紀にかけてフランス宮廷で発達し、オペラ中にも採用されたものが、後に音楽伴奏・背景を伴う舞台舞踊として独立した。その後、一旦衰退するが、ロシアで踊られ続け、19 世紀後半、ロシアで現代

につながるクラシックバレエが生まれた。技術がどんどんと発達し、脚のテクニックを見せるために、水平方向に広がったクラシック・チュチュを着て踊るようになるなど、基本的な様式が整備されていく。

本研究においてクラシックバレエを採用した理由は主に以下の二点である。

①身体の形を表す言葉、技法の用語の定義が他のダンスジャンルに比べ統一されており、論文という文字を通して共通理解を得ることに向いている

②古典作品と呼ばれるバレエ作品は芸術として確立されており「スポーツ鑑賞」を目的とした本研究に適している。

第２章　先行研究の検討

第１節　「するスポーツ」と「みるスポーツ」の関係に関する研究

第１項　直接スポーツ参与の視点から

直接スポーツ参与は一次参与ともいわれスポーツの中心的参与形態と考えられる。競技性の高いスポーツ活動の中では、競技者や指導者の技術向上、トレーニング支援のため、観戦や視覚的教材を活用する研究が報告されている。しかし、本研究では競技性の高い対象者に限らず、生涯スポーツとして実施している対象者の研究を中心に先行研究を検討した。スポーツ参与の規定要因については金崎ら（1982）を代表に社会学、社会心理学の視点からスポーツ参加の規定要因を明らかにしている。同研究グループにより行動予測因が研究され、変数として「スポーツとのかかわり」が検討されている（金崎ら, 1981）。その中には「みるスポーツの好嫌」が含まれているが、結果は、ほとんどの者が好きであることが明らかとなり、説明力を持たなかった。プログラム参加要因では、「運動スポーツ参加に対する価値志向」（山口, 1989）、継続化要因については「スポーツについての意識の型」（徳永, 1989）という要因が有意に作用すると報告されている。スポーツ観戦がこれらのスポーツへの意識や価値観に影響を与えることは十分予想がつくが、直接の影響については検討されていない。その後、スポーツライフスタイル研究、スポーツキャリア研究、スポーツコミットメント研究へ発展し、関わり方の質や多様性に触れるものの、直接スポーツ参与以外の参与形態についてほとんど考慮されていない。

表 2-1　直接参与形態の研究

論文	従属変数	要因	結論
金崎ら,1981	参与の規定要因	みるスポーツの好嫌	説明力を持たない
山口,1989	プログラム参加の規定要因	運動スポーツ参加に対する価値志向	有意差が認められる
徳永,1989	継続化要因	スポーツについての意識の型	有意差が認められる

第２項　間接スポーツ参与の視点から

間接スポーツ参与は、直接スポーツ参与の関連を前提として研究がおこなわれた。特に、観戦者行動の研究において過去のスポーツ実施経験、同一種目のプレー経験などを属性の

ひとつとして検討している(池田ら,1984：古屋,1986：斎藤,1991：藤善,1994：上原,2002：渡辺,2005)。佐野（2007）は、国際イベントの観戦者について調査を行い、同一種目のプレー経験とその他のスポーツ種目について、基本的属性とは独立した形で分析しており、競技によってその割合は特徴付けられている。さらに、スポーツ観戦の形態が多様化してくると、川口(2004) のようにテレビ視聴を対象とした研究もおこなわれ、プロ野球と高校野球の視聴者について野球経験の違いが、充足様態の違いに影響を及ぼすと述べられている。

表 2-2　間接参与形態の研究　その１

論文	従属変数	結論
池田ら、1984	スポーツ消費行動の有無	観戦には学習、娯楽、応援、ドラマ、カタルシスといった心理適用因果関係していることを示し、この心理的要因は性別、同種目の経験、競技方法ルールの理解度、イベントの性格によって異なる。
川口、1990	視聴者の充足様態	
斉藤、1991	観戦動機・観戦回数	
藤善、1994	観戦動機	
木佐貫、1996	ライブ観戦・TV観戦の観戦動機	観戦からサッカーを学んだり評価する傾向は男性に強い（するスポーツと見るスポーツを結び付ける）
佐野、2007	満足度	競技会の観戦者は種目ごとに経験の割合に差がある

間接スポーツ参与の結果として直接スポーツ参与を取り上げた研究として、林ら(2003)は、日本と韓国のＷ杯前後にサッカー実施への態度・意図・行動を測定し、態度・意図の向上を認めた。上原（2002）も同イベントについて高校生のサッカーへの関心とＪリーグへの興味が高まると述べている。それぞれ、みるスポーツはするスポーツに影響すると結論付けているが、実際にサッカー実施率向上は確認出来ておらず、有効性を検討する必要があると述べている。

表 2-3　間接参与形態の研究　その２

論文	従属変数	結論
上原、2002	サッカーへの興味・関心、サッカーの話題	W杯後にサッカーに関する会話が増え、関心が増加するものは女子に多かった。
林ら、2003	サッカーへの態度、意図、行動	みるスポーツはするスポーツに影響を与える。W杯後にサッカー実施意図と態度は上昇する。

第３項　舞踊の実践と鑑賞の視点から

有馬（2008）は、学生における鑑賞芸術の規定要因について触れており、舞踊を含む項目は過去の文化系部活動経験に有意差がみとめられている。

また、舞踊研究はダンスとして学校体育のなかで扱われてきた。秦（1995）によると、

創作ダンスにおける課題授業では、およそ１・２時間の学習単位内に「踊る・創る・見る」の要素をすべて含み、バランスの良く取り入れていけるよう展開されている。ダンス教育の狙いのひとつとして「鑑賞力の向上」をあげており、ダンスジャンルによって相違があると述べている（中村ら、2003）。多くの研究対象校では発表会といったみる機会を与え鑑賞経験としている。宮本(2005)は、スポーツのように記録や勝敗という非常に判りやすい評価の観点を持たないダンスに対し、発表会を使って生徒自身にも評価の機会をつくりだすと述べている。このように授業の一部を用い鑑賞や参加の場を設定したとしても、鑑賞経験が授業の後にどのように習慣化するのかについての検討は皆無である。

表 2-4　舞踊における両参与形態の関係

論文	目的	結論
中村ら、2003	ダンス教育の狙い	ジャンルによってダンス教育の狙いが異なる。鑑賞力の評価は創作ダンスにおいて高い値を示した。
宮本、2005	パフォーマンス評価の基準	自らが授業のなかで聞いた指導言語を意識的に取り組み、他者のダンスを鑑賞する時の視点になる。
有馬、2008	政策やマーケティング基礎資料	舞踊を含む項目は女性、都市部在住、文化系の課外活動の有る人ほど鑑賞経験を持つ。

第４項　まとめ

先行研究から、直接スポーツ参与と間接スポーツ参与の関係についての研究は、主に観戦者行動における観戦者の属性として検討されていることが明らかとなった。間接スポーツ参与が直接スポーツ参与の態度・意図に影響すると結論付ける研究が存在するものの、十分な実証データがあるとは言えず、その影響を述べることは大変困難である。また、観戦における見方（見せ方）を設定しておらず、ただ見せるだけでは間接スポーツ経験は直接スポーツ参与への影響が弱い可能性も考えられる。観戦者研究においては、観戦者数、観戦回数、頻度を増やすことが暗黙の前提とされ分析されている。観戦意図、満足度、ロイヤリティといった心理的尺度を用いている研究についても、同様の前提は存在する。そのため、質的な調査は少なく(肥後,2010)、個人のなかで両参与形態がどのように結びついているのかは言及されていない。佐野(2007)が、観戦回数といった量的分析では観戦者の実態把握は十分でないと述べているように、今後の研究の方向性を検討する必要がある。

舞踊における実践と鑑賞を捉えるとき、今までの研究が学校教育を軸としてきたことが明らかとなった。しかし、学校体育における鑑賞は宮本（2005）の述べる「評価の機会を作り出すこと」に等しく、プロスポーツを観戦することと同義ではない。舞踊鑑賞について、過去の活動経験を対象者の属性のひとつとした研究では、その影響を文化系部活動と

いう大きな枠で捉えられていたことや、鑑賞が参加へ与える影響について分析されておらず、スポーツと同様に両参与形態からの視点を併せ持つ研究を試みる価値があると考える。

今日では、スポーツ参加者、スポーツ観戦者のどちらも重要な研究対象となったが、早川(1996) 宮本(2006) が指摘するように、するスポーツとみるスポーツの関心は分かれてきている。特に学校体育のダンスを含む舞踊や、芸術系スポーツは実践と、鑑賞が明確に分離しており、前述の指摘が同様に大きな課題として存在しているように思われる。

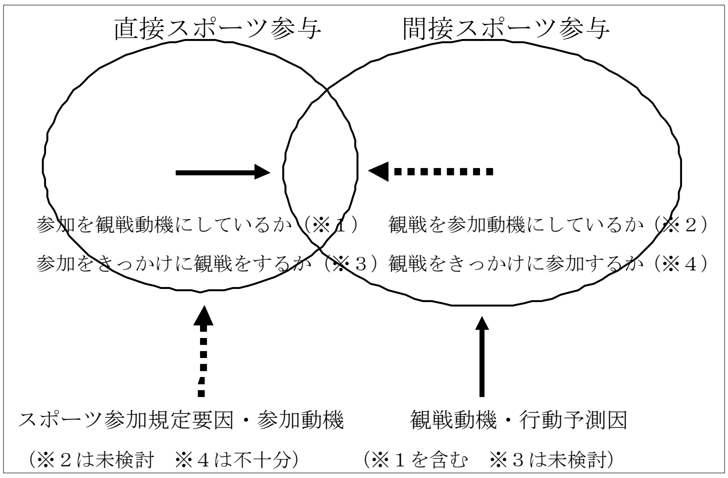

図 2-1　直接スポーツ参与と間接スポーツ参与の関係

第２節　映像認知に関する研究

第１項　映像認知プロセスについて

映像は画面に含まれる要素が多すぎるため、受け手は、画面のどの要素にどのように対応するかについて意識的であれ、無意識的であれ、あらかじめある程度決定している（Geiger＆Reeves、1991)。しかし、映像の認知プロセスにおいて何らかの刺激を与え、こうした心理状況（心的世界）を操作する事が可能である。金井（2001）は、映像認知には、大きく二つのプロセスが存在し、ひとつは映像を観る瞬間のプロセスと、映像の認知をもとに理解（鑑賞）を行うプロセスであると明らかにした。また、二つのプロセスのどちらを重視するかによって、映像の修辞の持つ目的が変わってくる。

本研究では、調査票の配布時間など、実験条件から、映像を観る瞬間のプロセスに着目する。映像をみる際に解説をあわせたが、解説は一種の映像の修辞であると考えられる。感情効果を態度・行動意図と捉え、心的世界を脱し行動に移す。

さらに、映像を使って、教育研究や教育実践の場で活用する動きも広がっている（三尾、

1997)。映像教材の利用場面がますます多くなると予測される現在、体育・スポーツの分野でも、その内容の評価方法、認知プロセスに注目する研究は重要な領域となるのではないか。本研究では、メディアの中でもDVD映像を用い、人の視点設定に注目した態度・行動意図の変化について明らかにすることを目的としている。そのため、認知プロセスモデルをあらかじめ理解し、スポーツシーンについても視点設定の観点から映像の認知を分析することは意義がある。

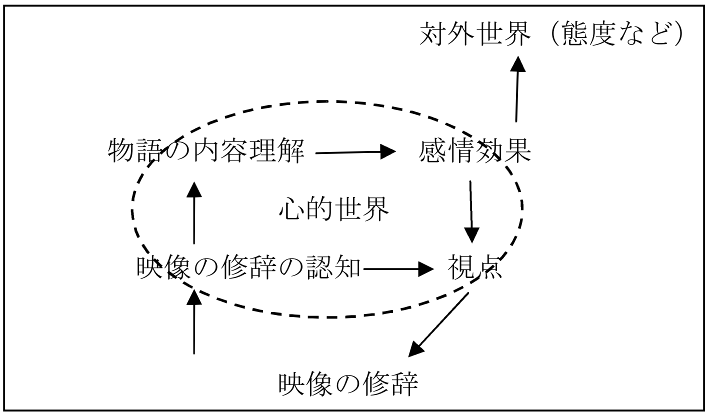

図2-2　映像の修辞に関する認知プロセスモデル【金井（2001）をもとに作成】

第２項　体育・スポーツに関する映像について

古谷ら（2006）は、近年、他視点から撮影された映像をコンピュータ内部で融合し、ユーザが希望する視点日からの見え方を再現する、自由視点映像技術に関する研究が盛んに行われている、と述べ、世界陸上の DVD を用いイメージの変化を調査した。陸上というタイムや高さといった数字で明らかに結果の出る競技に物語性を持たせ、みた後に陸上へのイメージが変化していることが明らかとなった。

表2-5　映像認知に関する研究

	映像	対象	評価
川口(1990)	野球中継	プロ野球と高校野球の中継	充足
三尾(1997)	教材	画像情報を変えた3種類の映像	
金井(2001)	映画	一貫性（物語性）のあるものとないもの	内容理解と面白さ
古谷ら(2006)	世界陸上DVD	陸上の試合における物語性を伝達	実験前後の感想文（イメージの変化）
川村(2007)	広告	100本の広告映像	好感度
古澤ら(2009)	教材	映像教材のある授業とない授業	学習意欲

第３節　態度・行動意図に関する研究

上原（2002）は高校生に対し、サッカーワールドカップがもたらした影響について研究を行った。「する」スポーツと「みる」スポーツを高校生はどのように捉えたか、ワールドカップ観戦の実態はどのようなものか、人間関係に影響があったかを調査している。「態度」の変数として、「するスポーツ・みるスポーツどちらが好きか」「J リーグへの関心は増えたか」を用いている。「意図」は、「今後スポーツ競技番組を見たいか」「J リーグを観に行きたいか」、「行動」は、「スポーツ競技番組をみているか」「ワールドカップをどこで観戦したか」「友人・家族とのサッカーの話題が増えたか」としている。結果、「みる」スポーツは生活の中にスポーツの楽しみとして取り入れられることが増え、さらに「する」スポーツとしてのトップスポーツを支える力になる可能性も有していることが明らかとなった。たとえ、最高のスポーツパフォーマンスをみたとしても、ルールの枠組みを知らない顧客はゲームに参加する事が出来ず、貧弱な楽しみしか味わえない。また、スポーツの歴史テクな背景なども楽しみのクオリティに影響すると考察している。結論として、ひとりひとりの生涯にわたるスポーツ享受について改めて目を向けることができた。そして、「見るスポーツ」に教育的価値を見出すことが出来たと指摘している。林ら（2004）は、「みる」スポーツが「する」スポーツに及ぼす影響に関して、ワールドカップの観戦とサッカー行動に着目し、態度、意図、行動という行動予測モデルを用い検討するとともに、その影響の違いについて日本と韓国で比較分析を行っている。「態度」として「ワールドカップ大会前後、サッカーをすることに対してどのようなイメージ、考えを持っていましたか」という質問に対し、6 項目（興味深い・有益・役に立つ・面白い・楽しい・積極的）を設定した。「行動意図」に関して「あなたは、ワールドカップ前後、今年中にサッカーをしたいと思っていましたか」という質問に対しリッカート式尺度で測定している。

これらの先行研究をもとに、本研究では「態度」については林ら（2004）の 6 項目を採用した。本研究では「行動」に至るまでを追うことが困難なため、「行動意図」を測定する。

表 2-6　態度・行動意図に関する研究

	態度	行動意図
徳永ら,1989	スポーツへの意識（態度・快感情と不安感情、信念・心理的効果と社会的効果と身体的効果、規範信念）	一週間以内のスポーツ活動を「しない・おそらくしない・おそらくするだろう・かならずする」
賀川ら,1990	行動規範得点	
上原,2002	好き嫌い、Jリーグへの関心	スポーツ競技番組視聴に対する行動意図
林ら,2004	つまらない興味深い、無益有益、役に立たない役に立つ、面白くない面白い、楽しくない楽しい、消極的積極的（7段階尺度）	サッカーをすることに対する行動意図

第３章　研究方法

第１節　研究枠組みの提示

「みる」スポーツの効果をみる手法として、みた前後に同一人物の変化を測定ものは無く、研究方法として確立されているわけではない。ＤＶＤの内容、試合の詳細、解説についても触れられているものは少ない。したがって、本研究における目的に対し、以下のような３つのステップを研究枠組みとして設定した。

Step1　予備調査

本研究に使用する方法を確認するための予備調査である。調査の対象者となる大学生に、介入方法として口頭による「解説」が有効であるか、を確認する。さらに、先行研究によって採用した「態度・行動意図」についての調査項目６項目を使用し、改善すべき箇所を確認した。

Step2　ＤＶＤコンテンツのプロダクト構造分析

本研究の目的のなかで「どのようにみせるか」を操作するため、調査対象者である鑑賞者がどのような情報を受け取っているのか明らかにする必要がある。本調査に向け、「どのようにみているのか」、つまり、バレエＤＶＤをみている視点について、プロダクト構造の概念を用いて分析する。その結果により、本調査の解説内容が選択、決定される。

Step3　本調査

上記２つのステップを経て本調査を行う。解説によって視点の操作がなされ、その結果態度や行動意図に変化があるのか明らかにする。対象者のバレエ・ダンス経験によって、鑑賞前後の態度・行動意図の変化に差があるかについても考察する。

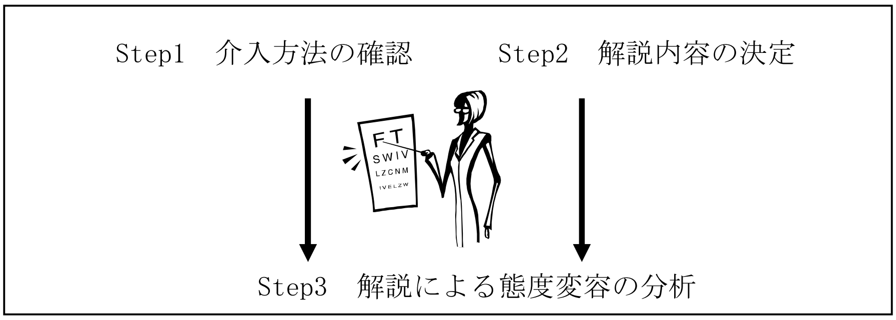

図 3-1　分析枠組

第２節　研究の限界

本研究において、調査の結果として生じた限界は第５章の考察で述べるとし、ここでは研究方法上の限界を述べることとする。

本研究では、スポーツ鑑賞の題材としてバレエを採用した。バレエを採用した理由としては、第 1 章第 3 節にて、使用される言葉が統一されていることなどを挙げた。しかし、中学校の保健体育ダンス必修化において、バレエは指導内容に含まれない。一般にも、バレエは芸術と捉えられることが自然であり、特に「みるバレエ」を観戦ということはなくスポーツとしては得意な存在である。そのため、本研究の結果をスポーツ全般に一般化させて解釈することは困難である。これらの限界をふまえた上で、他のダンスのジャンルやスポーツ種目へ提言を行い、指導現場に活かされることを期待している。

また、態度変容に関する先行研究において、態度の変化には男女差があることが明らかとなっている。本研究では、対象者として男性を集めることが困難であった。したがって、分析に使用する有効回答は女性のみである。研究の背景として中学校の保健体育におけるダンス必修化をあげた。中学校においては当然、対象となる生徒の約半数が男子中学生である。この点は、今後の課題である。

第４章　鑑賞者における態度・行動意図の変容

第１節　　予備調査

予備調査では、教師による口頭の解説が、鑑賞者の態度・行動意図へ影響を与えると確認することを目的とする。

第１項　調査概要

調査日　2010 年 4 月 7 日

対象者　W 大学オープン教育科目「バレエ基礎」授業　受講生

回収数　計 107 名　（有効回答率 100％）

調査方法　質問紙調査

バレエ作品（DVD）　「ラ・シルフィード」

第２項　分析方法

DVD 鑑賞時に合わせる解説内容により、対象者を 3 グループに分けた。各グループの人数および、解説内容は表 4-1 のとおりである。予備調査における解説内容は武隈（1991）示された「プロダクトの便益構造」を、バレエに応用する形で設定した。3 グループの群間、さらにバレエ経験によって鑑賞前後の態度・行動意図の差を比較した。

表 4-1：解説内容

Group 1	34 人	技術や、それを生みだす身体的特徴について
Group 2	38 人	表現力や作品のストーリーについて
Group 3	35 人	ダンサー、バレエ団、衣装、舞台美術について

第３項　調査項目

第二章 先行研究（態度・行動意図に関する研究）を参考に、行動に結びつく態度として使用されているすべての項目を採用した。使用した項目は、「好きー嫌い」「興味深いーつまらない」「有益ー無益」「役に立つー役に立たない」「楽しいー楽しくない」「得意—苦手」「積極的ー消極的」「身近ー疎遠」である。それぞれについて 7 段階の SD 法を用いた。

第４項　結果

● バレエ経験

表 4-2：対象者のバレエ経験

	初心者	再開者	継続者 (3 年以下)	継続者 (4 年以上)	合計
Group 1	16	13	2	3	34
Group 2	16	16	1	4	38
Group 3	17	10	2	7	35

授業をきっかけに初めてバレエを行った人を「初心者」、過去にバレエを習っていたことがあり 2 年以上のブランクを経験したのち授業をきっかけに再開した人を「再開者」、授業以前にバレエを始めている人を「継続者」とした。継続者の中には、3 歳～8 歳に開始し現在まで続けているものと、大学入学時期に始めたものとに分かれていたため、経験年数を 3 年以下のものを別途表記した。

● 鑑賞経験

表 4-3：対象者のバレエ鑑賞経験

	直接舞台をみたことがある	TV や DVD でのみみたことがある	みたことはない	無記入
Group 1	23	6	5	0
Group 2	27	7	3	1
Group 3	27	8	1	0

● ＤＶＤ鑑賞前後の態度・行動意図の変化

表 4-4：鑑賞前後の変化

	好き	興味深い	継続意図
Group 1	0.325	0.325	0.744
Group 2	**0**※※※	**0.047**※	**0.038**※
Group 3	0.16	0.711	0.768

※p<0.05、※※※p＜0.001

DVD 鑑賞前後の平均値についてｔ検定を行ったところ、上記の態度 2 項目（「好き」「興味深い」）、行動意図（「継続意図」）について有意な差がみられた。

表 4-5：行動意図の変化

	初心者	経験者
Group 1	0.371	0.473
Group 2	**0.03**※	0.094
Group 3	0.31	0.453

※p<0.05

表 4-6：「身近」の変化

	初心者	経験者
Group 1	0.115	0.062
Group 2	**0.03**※	0.083
Group 3	**0.039**※	0.097

※p<0.05

また、対象者のバレエ経験によって、初心者と経験者（再開者と継続者を合わせたもの）に分類しｔ検定を行ったところ、態度 1 項目（「身近」）と行動意図（「継続意図」）について有意な差がみられた。

● 感想文の内容

表 4-7：感想文の内容

	身体的特徴	技術	ストーリー	衣装など	その他
Group 1	13	8	2	3	5
Group 2	3	2	23	3	1
Group 3	10	3	18	10	3

単位（人）

ここで、解説内容として使用した「身体的特徴」「技術」「ストーリー」「衣装や舞台装置など」を基準に、鑑賞者の感想文を分類した。その結果、解説内容と感想の内容には関係性がみられ、口頭の解説によって鑑賞者の意識や、注目箇所に影響を与えることが出来たと考える。

第５項　考察

第４項に記述した結果から、教師による口頭の解説を付けることで鑑賞者の意識や注目する点に影響を与えることが出来ると明らかになった。態度・行動意図についても解説内容によるグループ間の相違がみられ、その影響は初心者に顕著であった。こうした映像や解説といった刺激が、初心者により強く影響する事はいくつかの先行研究を支持する結果であり、バレエについても同様であることが示された。

しかし、本調査にむけた課題も明らかとなった。予備調査では「好き－嫌い」「興味深い－つまらない」「有益－無益」「役に立つ－役に立たない」「楽しい－楽しくない」「得意―苦手」「積極的－消極的」「身近－疎遠」といった形容詞対を尺度として用いたが、調査対象者からは、この尺度が「するバレエ」について聞いているのか、「みるバレエ」について聞いているのか不明確であると指摘があった。形容詞対を並べられるだけでは具体性に欠け、回答が難しいとの声も聞かれた。こうした意見を踏まえ、本調査へむけて態度・行動意図のうち、特に態度の尺度について再検討する必要がある。

さらに、本調査では解説内容についても精査が必要であると感じた。予備調査の際に参考とした武隈（1991）における「プロダクトの便益構造」はスポーツを行うことについてである。本研究では DVD 鑑賞における視点、注目する点が必要なため、スポーツ観戦におけるプロダクト構造をもとに解説内容を作成する。

第２節　　DVD コンテンツのプロダクト構造

本調査に使用する解説の内容を精査、決定するため、プロダクト構造の概念を応用し、クラシックバレエの DVD コンテンツをみる視点（注目する点）を明らかにする。

第１項　調査概要

調査日　2010 年 7 月 20 日～8 月 20 日

対象者　W 大学および T 大学のダンス部・ダンスサークル

回収数　80

調査方法　郵送法を用いた質問紙調査

ＤＶＤ　バレエ作品「海賊」

第２項　分析方法

本研究で使用するＤＶＤとは別作品のクラシックバレエを鑑賞し、ＤＶＤの感想を聞くプロット調査を行った。その後、Chasen（自由記述の解析ソフト）を用いて形態素分析[注1)]を行った。 その中で、出現頻度が２以上の単語の入った文を内容別に分類し、特定の作品にのみ対応する単語は一般化させた。以上の手順で得られた 31 の要素と、作品解説や舞踊研究の文章から考えられる要素５つを加え、36 の要素を作成した。質問紙を用いて 5 段階評価で回答を求めた。

第３項　調査項目

自由記述による質問紙調査から得た回答をもとに、表 4-8 に示す 36 項目が設定された。

表 4-8：ＤＶＤ鑑賞の視点

1	主人公の踊るシーン	19	役による踊り方の違い
2	有名なシーン	20	有名なダンサーの踊り
3	バレエらしいシーン	21	男性ダンサーの踊り
4	踊りのないシーン	22	コールドダンサーの踊り
5	動きの滑らかさ	23	バレエ音楽
6	手足の動き	24	オーケストラ
7	動きの軽さ	25	衣装
8	動きの美しさ	26	髪飾りや小道具
9	役へのなりきり	27	舞台装置
10	役の持つ独特の雰囲気	28	恋愛のお話
11	ダンサーの表現力	29	全体のストーリー
12	ダンサーの演技力	30	物語性
13	ダンサーの表情	31	動きの激しさ
14	ジャンプの高さ	32	ダンサーの柔軟性
15	ステップの正確さ	33	ダンサーの経歴
16	マイムの意味	34	バレエ団の歴史や組織
17	回転の美しさ	35	作品の歴史的背景
18	ダンサー同士の相性	36	技術の成り立ち

第４項　結果及び考察

因子分析（主因子法・バリマックス回転・固有値 1 以上）を行った結果、9 因子が抽出された。9 因子は、あらかじめクラシックバレエＤＶＤのプロダクト構造として予想していた、技術因子（ジャンプや回転に注目)、ストーリー因子（物語性やストーリー、演技力など）などが必ずしも一つの因子を構成していないものであった。さらに、多くの因子に影響力のある項目が存在していた。したがって、結果は、本調査で使用する解説が因子をまたぐような内容にしないための確認作業ととらえ、各因子の中心的な項目で、かつ他の

項目と相関の低いものを解説内容として使う。

因子の中心的項目のみ採用するため、0.4 以下の項目を除き、他の因子への影響が強いものは好ましくないため、0.1 以内に他の因子にも負荷量の高い値があるもの、他の因子に 0.4 以上の数値があるものを除いた。こうした手順の結果、23 項目が残った。

さらに、実験条件の限界から、解説内容を 3 グループに分類する必要がある。因子数を強制的に 3 因子に設定し、主因子法（プロマックス回転）を行った。

表 4-9：因子分析の結果

因子	項目	寄与率	解説
F1：動き・ダンサー因子	手足の動き	31.32	動き・ダンサーの解説
	回転の美しさ		
	主人公の踊るシーン		
	動きの美しさ		
	動きの軽さ		
	有名なダンサーの踊り		
	ジャンプの高さ		
F2：物語・舞台環境因子	物語性	8.056	物語・舞台環境の解説
	髪飾りや小道具		
	全体のストーリー		
	バレエ団の歴史や組織		
	舞台装置		
	衣装		
	ダンサーの経歴		
F3：表現因子	役へのなりきり	3.891	表現の解説
	ダンサーの演技力		
	ダンサーの表現力		

第一因子は、動きやダンサーに関する因子、第二因子は、物語や歴史や背景に関する因子、第三因子は、表現に関する因子が抽出されている。前段階の因子分析と同じように項目をいくつか削除した。前段階とは大きく結果と異なる項目は、現段階で分類された因子へも影響力があると考えられるため、解説内容として使用することは好ましくないと考えた。以上の結果から、解説内容として分類できるものをグループ化し、名前を付けた。

第３節　　本調査

第１項　調査概要

調査時期　2010 年 9 月 29 日

対象者　早稲田大学オープン教育科目　バレエクラス（応用）受講生

回収数　計 65（有効回答率 94.2%）

調査方法　質問紙調査

第２項　分析方法

有効な回答を得られた 65 人を 3 つのグループに分けた。各群に対し DVD 鑑賞時、異なる解説を与えた。クラシックバレエ DVD のプロダクト構造をもとに作成した解説内容は表 4-10 の通りである。第２節において設定された解説３群のうち、「表現に関する解説」は、他の解説に比べ内容が少なくなってしまうこと、寄与率が低いこと、また、ただみせるだけの対照群が必要であると考えたため、本調査では使用しなかった。

各群における、注目点および態度・行動意図の変化は 5 段階のリッカート法を用い測定した。群間の比較については、3 条件（解説群）×2 地点（鑑賞前後）での反復測定[注 2)]を行った。

表 4-10：解説内容

	解説群	内容
1群	ダンサー・技術解説群	技術（ジャンプ・回転・動き）・ダンサー（主人公・有名ダンサー）について
2群	物語・舞台環境解説群	物語性・環境（舞台装置・衣装）について
3群	対照群	最低限の情報と思われるものについてのみ解説を行う

第３項　調査項目

(1) 基本的属性

基本的属性について、鑑賞前には性別、クラッシックバレエの経験の有無と年数、その他ダンス経験の有無とその年数、クラシックバレエ鑑賞の有無とその内容、その他ダンスの鑑賞経験の有無とその内容、バレエ用語の知識、学校でのダンス体験の有無とその時期について回答を求めた。

(2) 態度・行動意図の尺度

予備調査の課題点が明らかとなった態度・行動意図尺度については、大幅に修正を行った。まず、「するバレエ」と「みるバレエ」を明確に分離させた。その後、「好き」「楽しい」「興味深い」については、3 項目が共通して好感を尋ねていることから「好感」として統一し、「有益」「役に立つ」についても「有益」として統一した。その後、好感については 3 項目、「有益」「積極的」「身近」「得意」については 2 項目を形容詞対ではなく文章として尋ねるように変更した。質問文作成にあたり、飽戸(2006)を参考にした。行動意図である「継続」については大きな変更点はない。

表 4-11：態度・行動意図の分類

		バレエを観ることについてどのように感じますか？	バレエを踊ることについてどのように感じますか？
態度	好感度	バレエを観ることが好きである	バレエを踊ることが好きである
		芸術として観ること自体を楽しめる	動きそれ自体を楽しめる
		バレエを観ることに興味がある	バレエを踊ることに興味がある
	有益度	バレエを観ることは普段の生活に役に立つ	バレエを踊ることは普段の生活に役に立つ
		バレエを観ることでバレエに役立つ情報が得られる	バレエを踊ることでバレエに役立つ情報が得られる
	積極度	バレエを観ることを人に薦めたい	バレエを踊ることを人に薦めたい
		たくさんの作品を知りたい	たくさんの踊りを踊れるようになりたい
	身近度	バレエを観ることに親しみを感じている	バレエを踊ることに親しみを感じている
		バレエを観ることは幅広い層に受けそうだ	バレエを踊ることは幅広い層に受けそうだ
	得意度	バレエ作品に詳しい	バレエを踊ることが得意である
		バレエの特徴をよく理解できる	バレエの特徴をよく理解できる
行動意図	継続意図	今後、バレエを観に行きたい	これからもバレエを踊り続けたい

(3) 注目点の尺度

鑑賞後にどの程度普段と違った視点でクラシック DVD をみたかについて測定するため、解説内容の作成で用いたプロダクト構造の項目を「その程度注目するか（したか)」の 5 段階で回答を求めた。

課題点を改善し、最終的な調査票は表 4-12 のようになった。◆は予備調査の後に加えたものであり、★は担当教師が授業の指導にあたり必要な項目である。■は、予備調査の課題などから内容を変えたものである。

表 4-12：本調査における調査票の内容

【鑑賞前】
★クラッシックバレエについてのイメージ（自由記述）
・クラッシックバレエの経験の有無と年数
・舞台鑑賞の有無とその内容
★バレエ用語の知識
◆学校でのダンス体験の有無とその内容
■バレエを踊ることへの態度
■バレエを観ることへの態度
バレエを踊ることへの行動意図(継続意図)
◆バレエを観ることへの行動意図（鑑賞意図）
【鑑賞後】
◆クラシックバレエのイメージ
・DVD 鑑賞の中で最も印象に残っている事はなんですか？（自由記述）
■バレエを踊ることへの態度
■バレエを観ることへの態度
バレエを踊ることへの行動意図(継続意図)
◆バレエを観ることへの行動意図（鑑賞意図）
◆視点操作がされているか？（DVD 鑑賞で〇〇について良く理解できるものでしたか？）
★この授業の受講理由（自由記述）
★授業への希望

第４項　結果及び考察

1.　基本的属性

⑴　バレエ経験

表 4-13：バレエ経験年数

	解説群	0-2年	3-5年	6-10年	11年以上	合計
1群	ダンサー・技術解説群	6	2	4	9	21
2群	物語・舞台環境群	7	2	6	7	22
3群	対照群	7	1	5	9	22

単位（人）　χ2 検定値（1.188）　自由度（6）　有意確率（p=0.977）

各群におけるクラシックバレエ経験の年数を比較したところ、群間に有意な差は見られずクラシックバレエ経験について同質な対象者であったことが分かった。

⑵　鑑賞経験

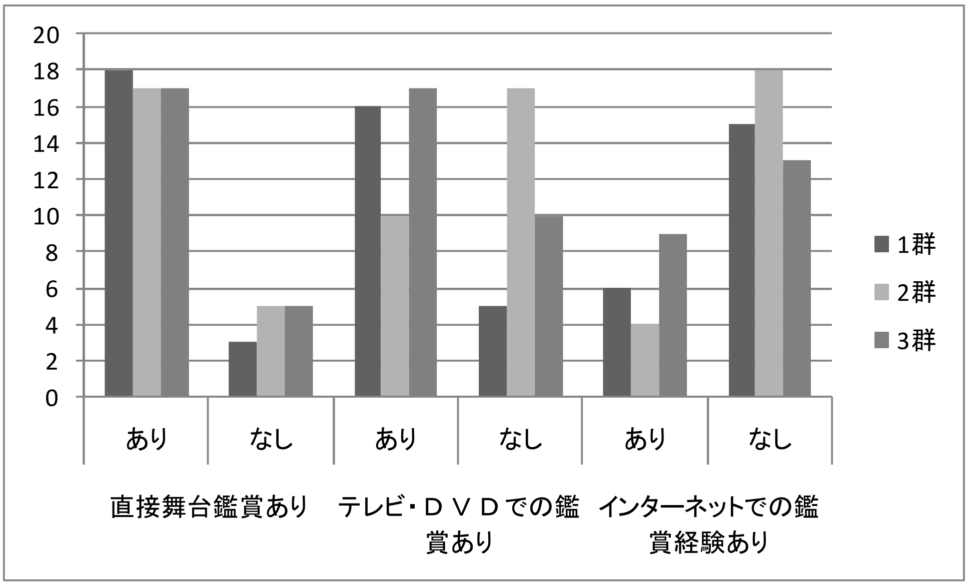

図 4-1：対象者のバレエ鑑賞経験

全ての群において約８割の対象者が直接舞台を鑑賞したことがあると回答した。経験年数が６年以上になるとすべての対象者に鑑賞経験があることが明らかとなった。近年、バレエ作品やコンクールの様子などインターネットで容易にみることが出来るため利用者が多いのではないかと予測したが、テレビ・ＤＶＤに比べ自ら検索する必要があるため行動に至るにはハードルが高いようである。全くみたことがない人は１群に１名、2 群に３名、3 群に１名であった。

(3) 学校でのダンス体験

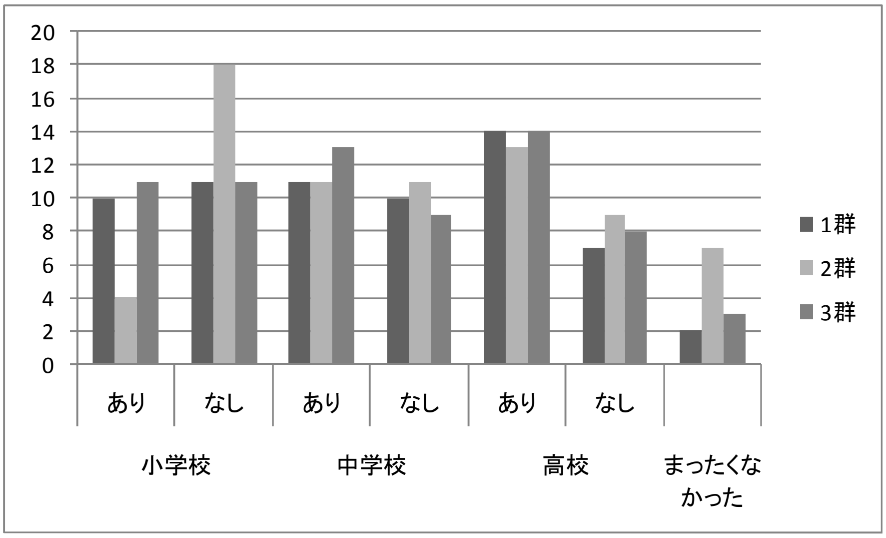

図 4-2：学校でのダンス体験

保健体育のダンスに限らず、ダンスに触れる機会があったかどうかについて回答を求めた。その結果、中学校・高校では約半数、さらにそれ以上の者がダンスに触れる機会があったと回答した。今後、ダンス必修化により、中学校では全員がダンスを行うことになる。

(4) 学校でのダンス鑑賞の種類

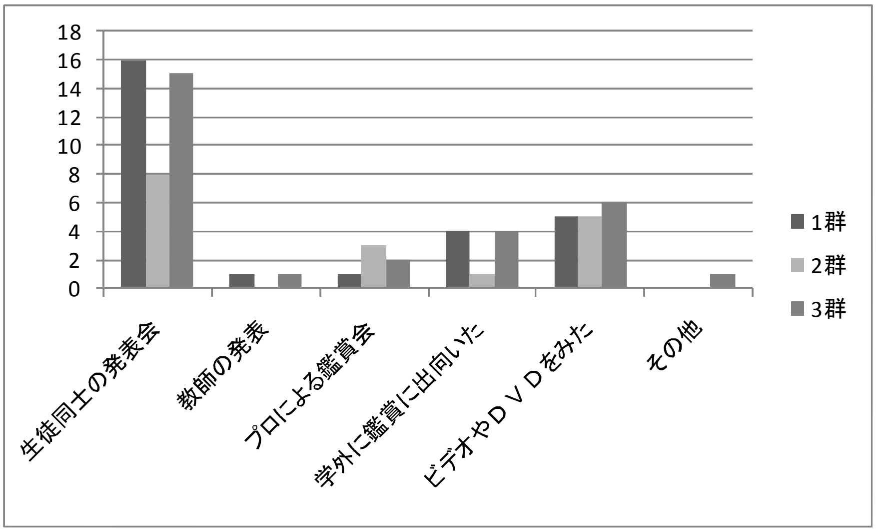

図 4-3：学校でのダンス鑑賞の種類

ダンスに触れた機会のうち、「みる」機会としてどのようなものがあるのか回答を求めた。学校でのダンス鑑賞の機会はそのほとんどが生徒同士の発表会であった。

2.　解説による注目点の変化

クラシックバレエのプロダクト構造とされた 18 項目は、鑑賞前後において各項目それぞれ平均値の差の検定を行った。

表 4-14：注目点の変化

	有意差あり			平均値の差（有意差なし）
見ることによる変化（1群2群3群すべてに変化のあったもの）				手足の動き・動きの軽さ・ジャンプの高さ・
解説による効果（1群2群と3群で結果の違うもの）				ダンサーの演技力・主人公の踊るシーン
解説による効果（すべての群で結果が違うもの）	手足の動き・動きの軽さ	1群	＋	有名なダンサーの踊り
	衣装・舞台装置	1群	－	
		2群	＋	
	ダンサーの経歴	2群	＋	
	回転の美しさ・ジャンプの高さ	3群	＋	

有意な差の認められた項目について解説のねらいが反映されているように思われる。1 群では、「手足の動き」や「動きの軽さ」といった身体的特徴により注目している半面、「衣装」「舞台装置」について注目がそがれていることが分かる。2 群において「衣装」「舞台装置」「ダンサーの経歴」により注目していることからも、解説がある場合は特に注目をするが、そうでない場合あまり注目されない内容であることが分かる。3 群では「回転の美しさ」「ジャンプの高さ」について有意な差が認められている。これは使用したクラシックバレエ DVD に華やかな男性の回転、ジャンプのシーンがあったため、解説の少なかった群では映像から受け取る影響が大きくなったと考えられる。

3.　態度・行動意図の変化

1）対象者全体の態度・行動意図の変化

態度・継続意図の 12 項目について鑑賞前後の変化を測定した。するバレエについては、各群に違いがみられた。その後、「バレエをみること」「バレエを踊ること」各 12 項目の質問項目を、項目作成の際に作成した表 4-11 に基づき、6 つの合計変数とした。それぞれについて、鑑賞前、鑑賞後の平均点を算出し、反復測定を行った。

鑑賞前、鑑賞後それぞれの群間について一元配置分析を行ったが、有意な差は認められなかった。したがって、鑑賞前後の比較が有効である。解説の主効果とは、鑑賞前後に全ての群を通して何らかの影響力があったかどうかを示すものである。

a)対象者全体の態度・行動意図の変化 - するバレエについて -

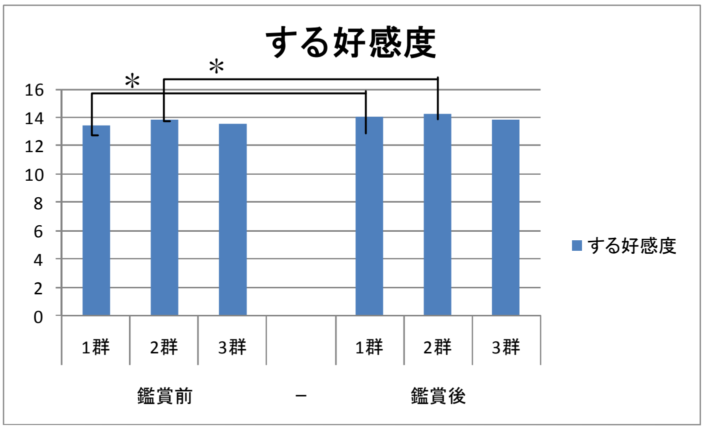

図 4-4：するバレエにおける好感度の比較

するバレエにおける好感度には解説の主効果があり（＊＊＊)、1 群 2 群について鑑賞前後の態度変化についても有意な差がみられた。鑑賞によってするバレエについても好感度が増していることが分かる。具体的には、1 群の「踊ることに興味がある」「踊ることが好きである」、2 群の「動きそれ自体を楽しめる」について態度変化が認められている。

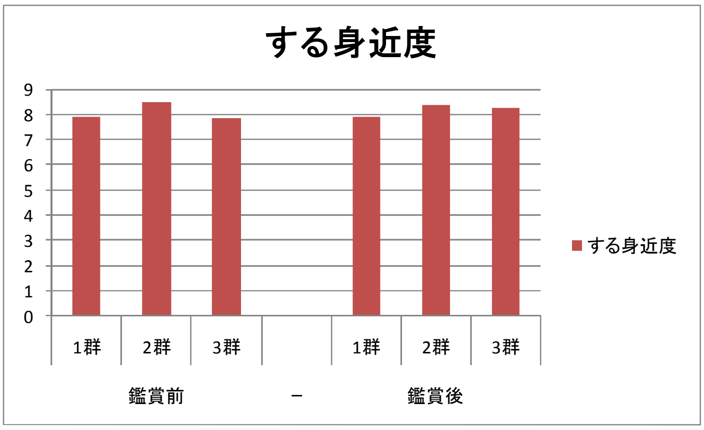

図 4-5：するバレエにおける身近度の比較

解説の主効果はなく、各群の態度についても有意な差は認められなかった。

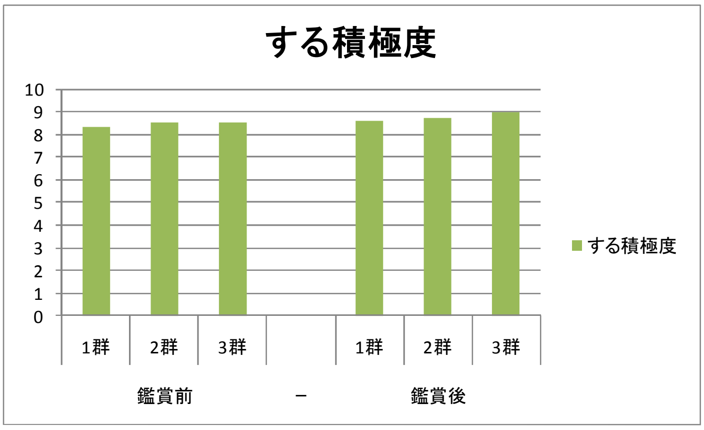

図 4-6：するバレエにおける積極度の比較

解説の主効果はあるが（＊）、各群の態度については有意な差がみられなかった。つまり、解説によってするバレエに対する積極度に影響を与えるが、その原因となるのが解説やその内容によるものではない。

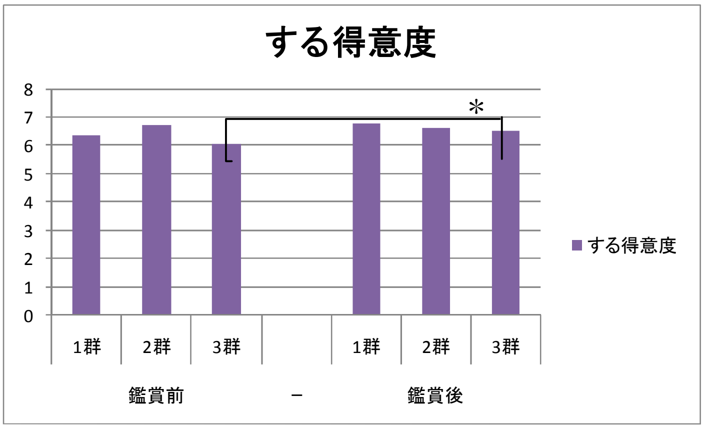

図 4-7：するバレエにおける得意度の比較

解説の主効果がなく、3 群にのみ解説前後の態度変化がみられた。するバレエにおける得意度は、「踊ることが得意である」「バレエの特徴をよく理解できる」の 2 項目によって構成されている。解説が少ない 3 群では、技術の難しさや作品の複雑さが強調されず、得意であるという態度につながったのではないか。

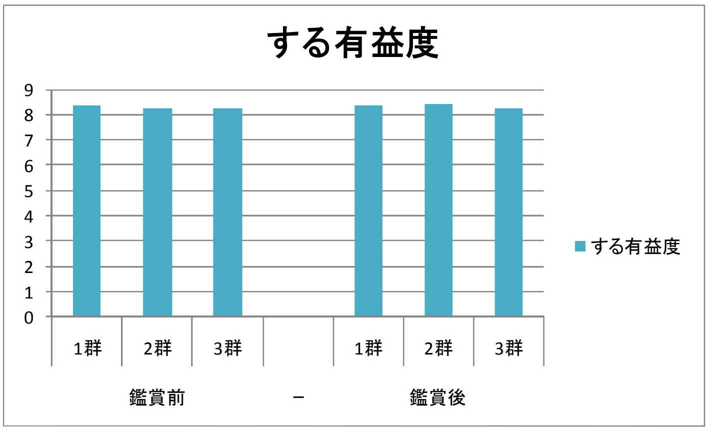

図 4-8：するバレエにおける有益度の比較

解説の主効果はなく、各群の態度についても有意な差は認められなかった。

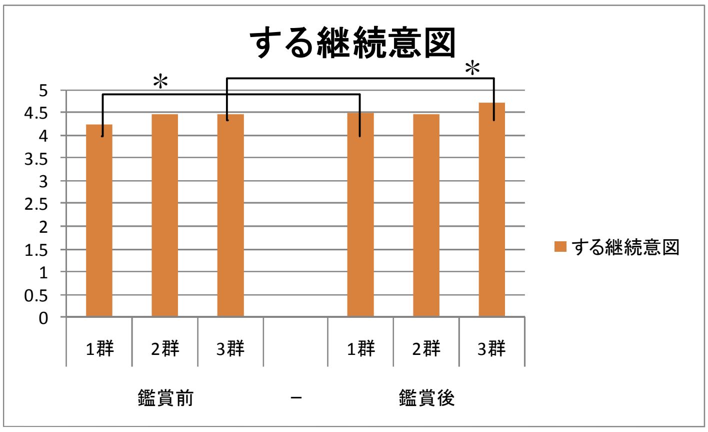

図 4-9：するバレエにおける継続意図の比較

解説の主効果があり（＊＊）、1 群と 3 群については行動意図への変化が認められた。2 群のように物語や舞台の環境など知識を解説した場合は、「するバレエ」への行動意図へは結び付かない事が分かった。

b）対象者全体の態度・行動意図の変化 - みるバレエについて -

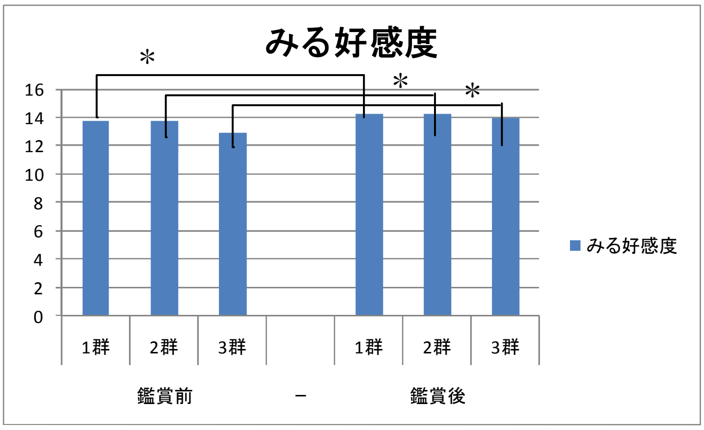

図 4-10：みるバレエにおける好感度の比較

解説の主効果があり（＊＊＊)、3 群についてのみ鑑賞前後で有意な差が認められた。具体的には 2 群の「みることが好きである」、3 群の「みることに興味がある」について態度変化がみられた。

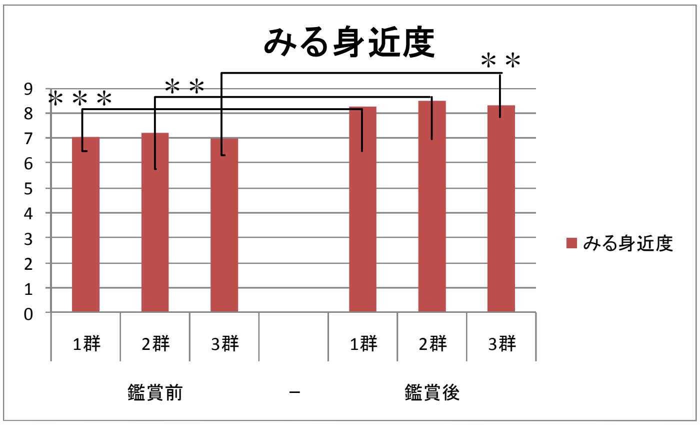

図 4-11：みるバレエにおける身近度の比較

解説の主効果があり（＊＊＊)、すべての群において鑑賞前後の態度変化に有意な差がみられた。有意確率は 1 群（p=0.000）2 群（p=0.001）3 群（p=0.001）となり、鑑賞行動は「みるバレエ」を身近に感じるのに大変有効であることが明らかとなった。具体的には 1 群の「みることは幅広い層に受けそうだ」、3 群の「みることに親しみを感じる」について態度変化が認められた。

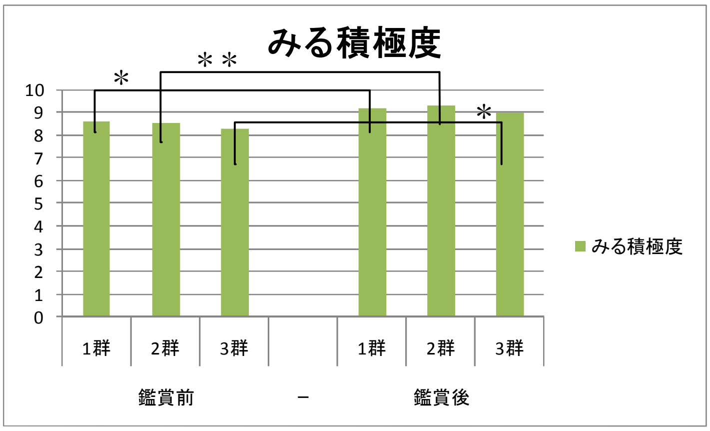

図 4-12：みるバレエにおける積極度の比較

解説の主効果があり（＊＊＊）、すべての群について鑑賞前後の態度に有意な差が認められた。具体的には、1 群 2 群 3 群すべての「たくさんの作品が知りたい」「みることを人に薦めたい」といった態度に変化がみられた。

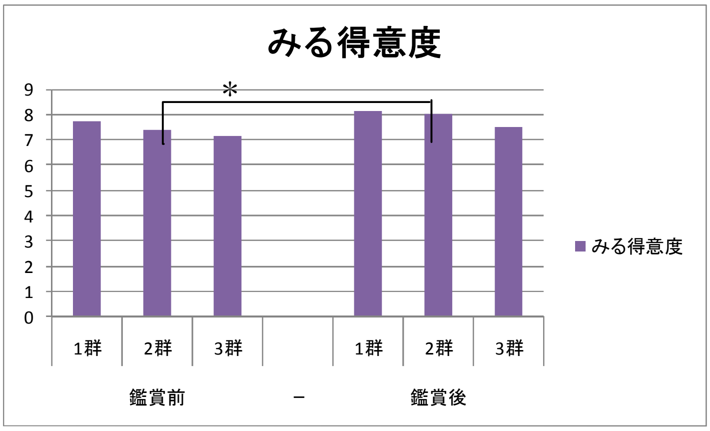

図 4-13：みるバレエにおける得意度の比較

解説の主効果があり（＊＊）、2 群にのみ鑑賞前後の態度に有意な差が認められた。物語に関する豊富な知識や、舞台環境の作り方などを知ることは、「理解できた」「詳しくなった」と感じるのに効果的であったことが分かる。

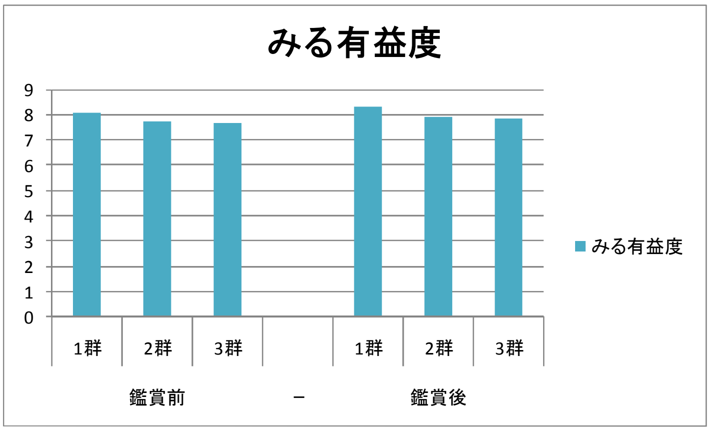

図 4-14：みるバレエにおける有益度の比較

解説の主効果はなく、各群の態度変化についても有意な差は認められなかった。「みるバレエ」への態度変化において、鑑賞の主効果がないのは「みるバレエへの有益度」のみであった。

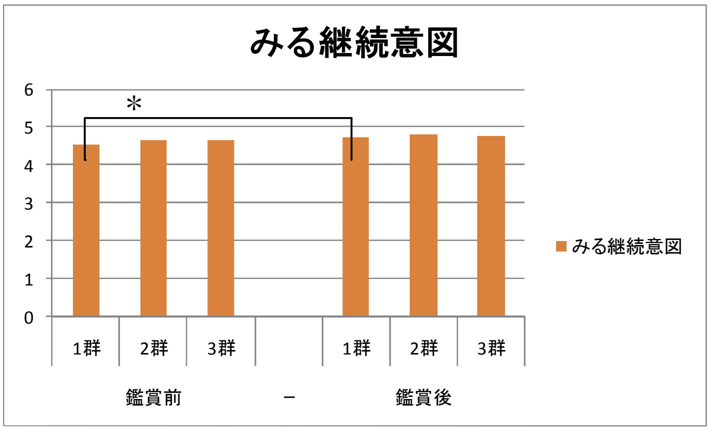

図 4-15　みるバレエにおける好感度の比較

解説の主効果があり（＊＊)、1 群についてのみ鑑賞前後の行動意図に有意な差がみられた。今後観に行きたいと思うことと、鑑賞直後の態度の向上が直接結びついていないように思われる。

以上の結果から、鑑賞という「みる」行為は「する」バレエへの態度に比べ、「みる」バレエへの態度により変化をもたらすことが明らかとなった。「みる」バレエへの態度については、「みるバレエへの有益度」を除く 5 つの変数で鑑賞前後の値が有意に向上し、解説の主効果がみられた。1 群 2 群 3 群すべて同じように変化しているものは、鑑賞行動が与えた「みることによる効果」であると考えられる。「みることによる変化」として「みる好感度」「みる身近度」「みる積極度」があげられる。こうした態度は解説の有無、内容にか

かわらずみることによって態度がより良い方向に変化することが明らかとなった。1 群 2 群が同じ結果を表し、3 群に違った変化があったものは「解説による効果」である。これは「する好感度」「する得意度」でみられた。鑑賞によって「するバレエ」への態度がより良い方向へ変化したことは注目すべき結果である。すべての群で効果が違うものは「解説内容による効果」と考えられる。「する継続意図」が 1 群 3 群で有意に向上していたのも、解説内容によるものと考えられる。「する継続意図」を高めるには技術やダンサーといった動きに関する解説を行うか、もしくはあまり多くを解説しない方が効果的であったと言える。「みる得意度」は 2 群のみ有意な差が認められ、舞台環境や作品などの知識が増えることでバレエの特徴が理解できたと感じるようだ。

2)バレエ経験による対象者の分類と態度・行動意図の変化

調査対象者のうちバレエ経験の年数によって分類した。初心者と長期継続者の変化を比較するため、経験年数が 2 年以下の対象者 20 名、10 年以上の対象者 33 名を比較する。それぞれについて、鑑賞前、鑑賞後の平均点を算出し、反復測定を行った。鑑賞前、鑑賞後それぞれの群間について一元配置分析を行ったが、有意な差は認められなかった。したがって、鑑賞前後の比較が有効である。

a)初心者の態度・行動意図の変化 - するバレエについて -

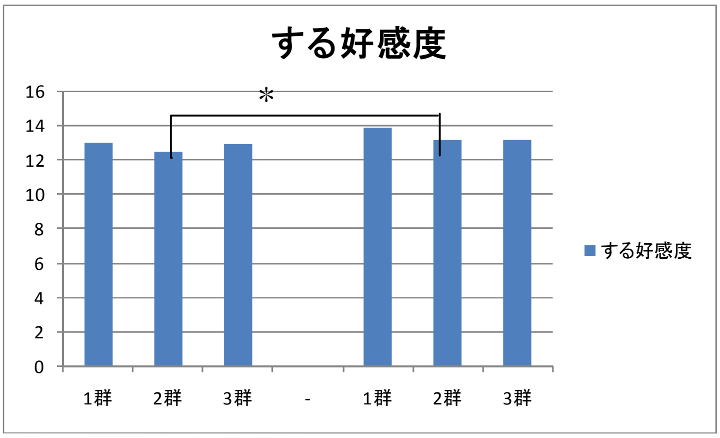

図 4-16：するバレエにおける好感度の比較

するバレエについては、する好感度にのみ有意な差が認められた。解説の主効果があり（＊）、2 群についてのみ鑑賞前後の態度に変化が認められた。初心者に対して、鑑賞というみる行為によってするバレエへの態度まで変化させることはほとんどできなかったと言

える。「する」ことと「みる」ことが大きく離れているような印象を受ける。

b)初心者の態度・行動意図の変化 - みるバレエについて -

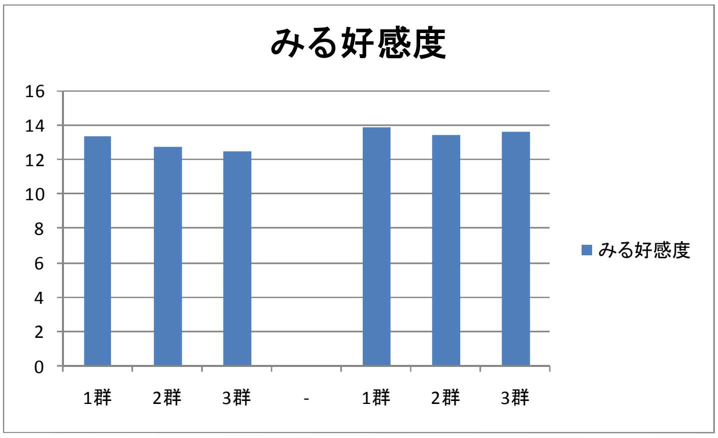

図 4-17：みるバレエにおける好感度の比較

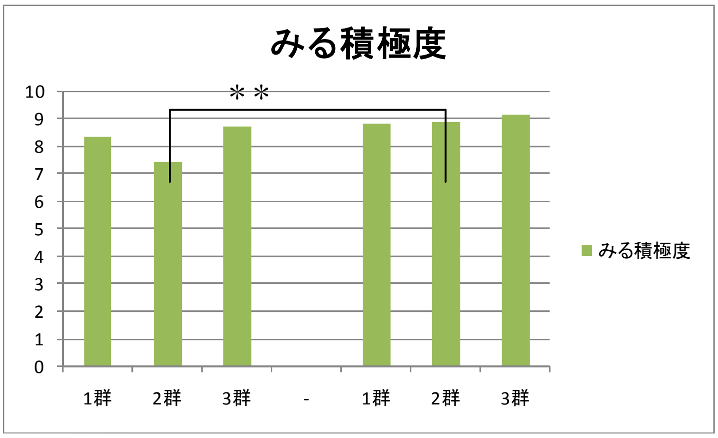

図 4-18：みるバレエにおける積極度の比較

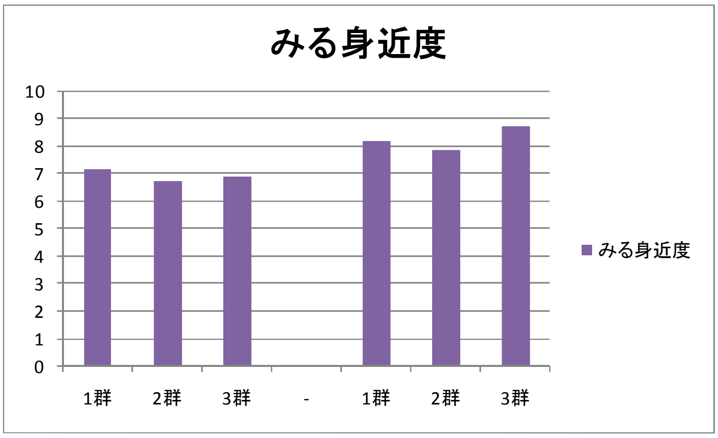

図 4-19：みるバレエにおける身近度の比較

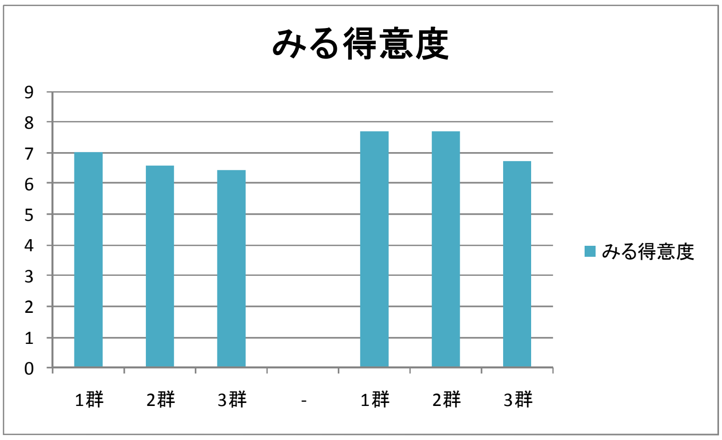

図 4-20：みるバレエにおける得意度の比較

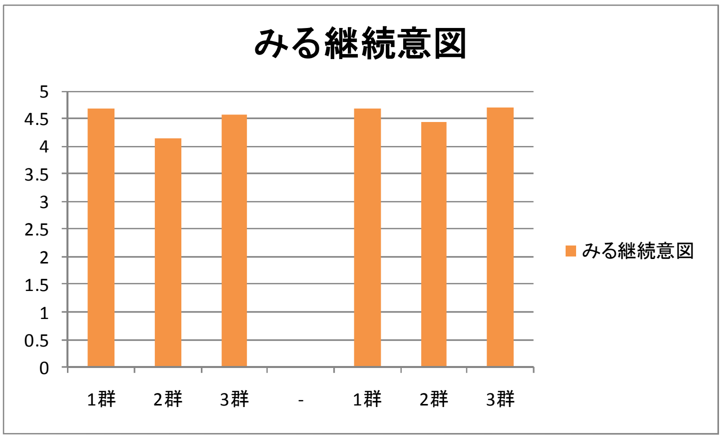

図 4-21：みるバレエにおける継続意図の比較

みるバレエについて、好感度、積極度、身近度、得意度に解説の主効果が認められた。積極度については 2 群の鑑賞前後に有意な差が認められ、物語や舞台上の環境について知識を与えることで積極的にみるようになったことが分かる。するバレエに比べ、鑑賞前後の変化が明らかであった。

c)長期継続者の態度・継続意図の変化 - するバレエについて -

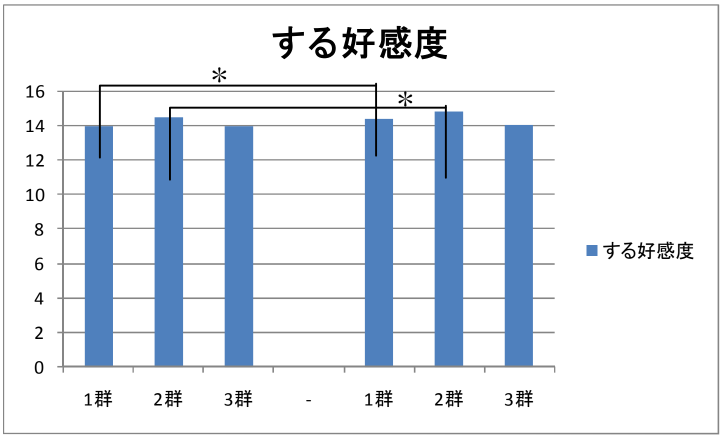

図 4-21：するバレエにおける好感度の比較

するバレエについて解説の主効果が認められたのは、好感度のみであった。あらかじめバレエに関する知識のある継続者は特に新しい情報の得られない対照群で変化がみられなかったことに注目したい。継続者へは焦点を絞った詳しい解説によって、するバレエへの態度に影響をあたえることが確認できた。

d)長期継続者の態度・行動意図の変化 - みるバレエについて -

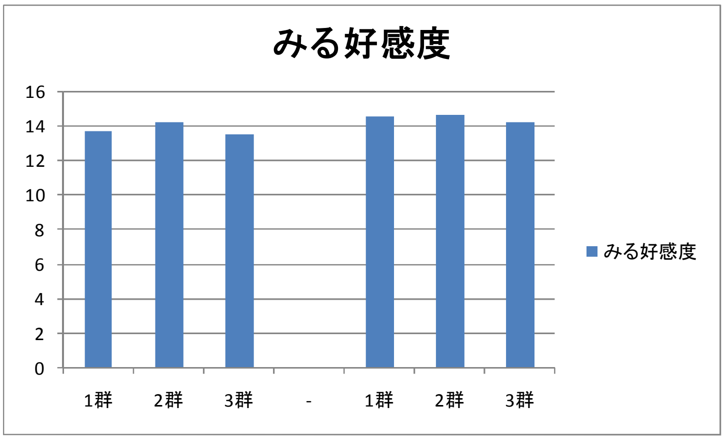

図 4-22：みるバレエにおける好感度の比較

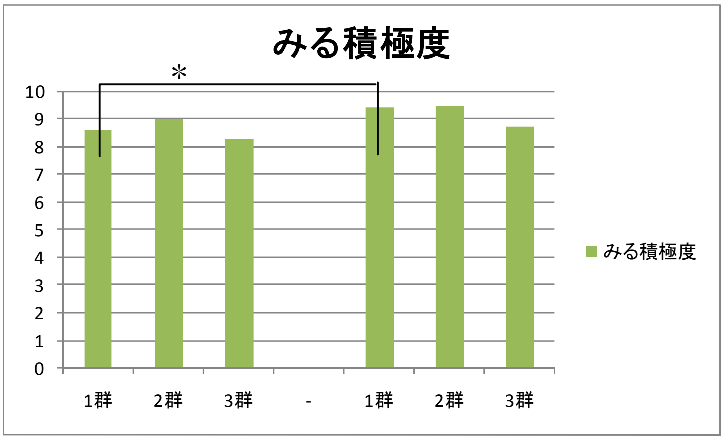

図 4-23：みるバレエにおける積極度の比較

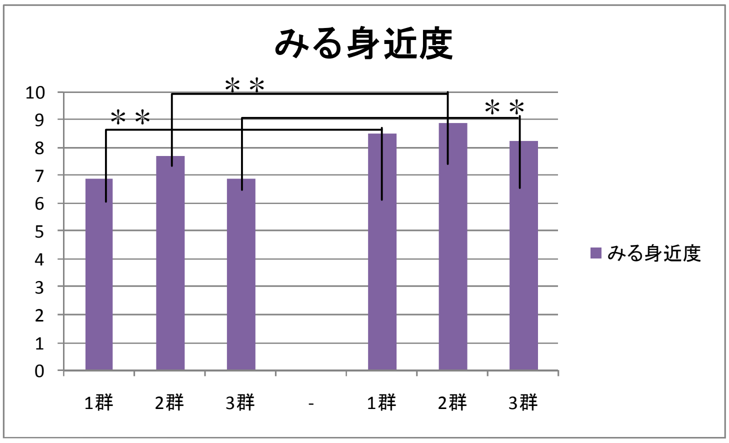

図 4-24：みるバレエにおける身近度の比較

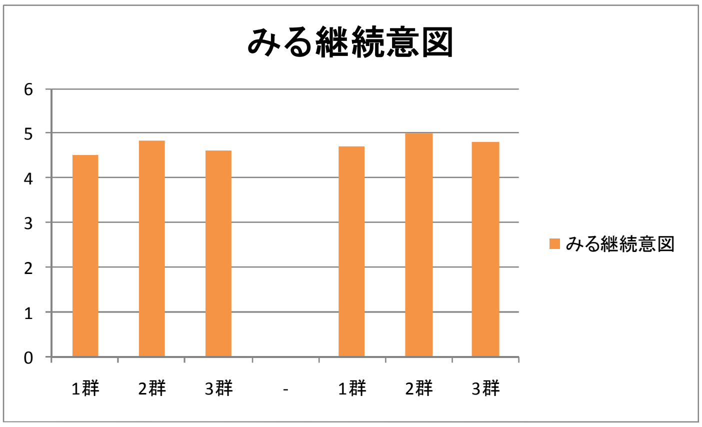

図 4-25：みるバレエにおける継続意図の比較

長期経験者のみるバレエに対する態度・行動意図の変化では、好感度、積極度、身近度、継続意図について解説の主効果が認められた。鑑賞によって、みるバレエへの態度・行動意図を大きく変えることが出来ることが明らかで、特に身近度には強く影響している。

（注）

注1） 形態素分析

形態素分析とは、単語として意味のわかる最小単位に切り、その出現頻度をみる分析方法である。

注2） 反復測定

２つの独立変数におけるいくつかの水準の相違を検討する仮説を設定した際の分析方法のうち、あるひとつの従属変数への影響（これを「効果」という）について検討する分散分析を、２要因の分散分析という。　さらに、２要因分散分析では、1 つ以上の組みに対応がある場合（混合計画）がある。要因の中に一つでも対応がある場合は、“反復測定”で分析を行う。

第５章　結論

第１節　まとめ

本研究では、大学生に対する３種類の調査を実施し、バレエを題材とした「みるスポーツ」と「するスポーツ」の関係について研究を行った。

まず、研究となる大学生を対象に口頭による解説が、その後の態度・行動意図を変えうるのか、方法として有効であるのかを確認した。その結果、解説の内容は鑑賞者に伝わっており、その内容の差によって態度・行動意図を変える可能性が支持された。しかし、質問紙に使用する尺度について多くの課題が残った。

そこで、鑑賞に使用するバレエ DVD をプロダクト構造の枠組みを用いて分析し、鑑賞者の視点を明確に操作できる解説内容を作成した。さらに、質問紙に使用する態度・行動意図の尺度は広告研究などを参考に修正を加えた。その結果、表 4-11 に示した 24 項目（「するバレエ」「みるバレエ」それぞれ 12 項目）が決定した。本調査の鑑賞前後における態度変化では合計変数を用い分析を行う。

本調査では、解説内容を変えた２つの群と、特に偏った解説を伴わない対照群の計３群について鑑賞前後の態度・継続意図の変化を分析した。群内および、群間の差について反復測定、鑑賞前後の平均値の差について t 検定を用いた。解説によって鑑賞者の注目点は変化し、対照群では映像のなかでも印象的な場面によって引きつけられていることが分かる。対象者自身が解説内容を他の群と比較をしたわけではないので与えられた解説内の情報、画面から分かることによって態度が変化しているようだ。本調査で用いたバレエ作品には男性ダンサーによる回転とジャンプの見せ場があり、注目点の変化と一致している。また、衣装や舞台装置といった舞台環境は解説がないことで注目度が減少した。解説の有無に影響を受けやすい内容であったと思われる。

態度・行動意図について、鑑賞により「みるバレエ」への影響が「するバレエ」への影響に比べ大きい。鑑賞というみる行為は直接「みるバレエ」への態度に結びついている。しかし、「するバレエ」との関係性について一部ではあるが明らかにすることが出来た。好感度は解説内容を変化させた１群２群について有意に上昇した。ただみせるのではなく、解説を付けみせることの有効性が示された。得意度が３群のみ有意に上昇したことも注目したい。１群２群では「するバレエ」における技術の高さやダンサーの苦労などを知り、

得意度はあまり上昇しなかったのだろう。得意度を上昇させるには、みる行為では難しいのではないかと考える。以下に、各解説群において、鑑賞前後にどのような変化があったかを示す。

表 5-1：解説内容およびバレエ経験による態度・行動意図の変化

		ダンサー・技術解説群	物語・舞台環境解説群	対照群
全体	する	好感度(*)　継続意図(*)	好感度(*)	得意度(*)　継続意図(*)
	みる	好感度(*)　身近度(***) 積極度(*) 継続意図(*)	好感度(*)　身近度(***) 積極度(*)	好感度(*)　身近度(*) 積極度(*)
初心者	する	なし	好感度(*)	なし
	みる	なし	積極度(*)	なし
長期継続者	する	好感度(*)	好感度(*)	なし
	みる	積極度(*)　身近度(*)	身近度(*)	身近度(*)

対象者全体の結果として、動きやダンサーについて解説を添えた1群は「みるバレエ」への影響が他の群に比べて高く、「みる」態度に直結していることが分かる。「みるバレエ」への継続意図に影響を与えているため、継続して鑑賞を行う観客を育てるには有効な方法であるのではないか。物語性・舞台環境について解説した 2 群では、「するバレエ」への継続意図の向上がみられず、バレエ作品の知識ばかり与えると「する」側面への態度・行動意図へ影響力が少ないようである。「みるバレエ」への得意度が、2 群についてのみ有意に向上したのも、「みる」ことに偏った結果と思われる。こうした負の影響も確認できたことで、解説のバランスも重要であることがうかがえる。

対象者を経験年数別に分析を行った。バレエ経験が０～２年の初心者では、有意な差の見られなかった態度・行動意図の項目において、「するバレエ」への影響力が弱く、鑑賞の影響が「みるバレエ」に影響していた。バレエ経験がなく、鑑賞やバレエ作品に関する知識もない初心者にとって「みるバレエ」から「するバレエ」へつなげて考えることは困難なのではないだろうか。しかし、2 群において、有意な差の認められた項目が存在した。これは、初心者へのアプローチとして 2 群のような知識を与えることが「みるバレエ」「するバレエ」どちらについても他の解説よりも有効であることを示している。初心者が鑑賞するにあたり、入り口にはこうした知識が必要なのではないだろうか。

さらに、10 年以上バレエ経験のある長期継続者では、「みるバレエ」への好感度が詳細な解説を加えた 1 群 2 群で上昇した。解説内容によって違いがみられなかったことは残念であったが、焦点を絞った解説内容に興味を持ち、好感度の上昇につながったのだろう。

「するバレエ」への影響は強く、有意差の認められなかった有益度、得意度についても有意確率が 0.1 以下であり、解説の主効果が全くなかったわけではない。鑑賞の内容として特に影響が強かったのは、技術やダンサーについて解説を行った 1 群であった。好感度と積極度への影響が強い。経験者は鑑賞と同時に解説の内容を自らの技術や身体に共感させているのではないだろうか。

次に実践的示唆を述べる。本研究が提言を行うことのできる場としてダンス必修化の授業があげられる。学校におけるダンス授業の特徴は、そのほとんどが初心者であることだ。予備調査や先行研究により、初心者は解説の影響を受けやすいことが分かる。また、解説を行う者が教師であればなおさらだろう。本調査の結果から、初心者は物語性・舞台環境を解説した 2 群においてより良い態度変化がみられた。物語性を理解することは映像を見るのに一貫性を持たせ、舞台環境については知識量が増え、積極的にみることができるのではないだろうか。有名な作品であれば、物語性や舞台環境は専門家に聞く機会がなくとも資料をそろえることができる。しかし、偏った解説内容には負の影響もあることも認識しておく必要がある。そして、生徒の「知」の成長に伴い、1 群のような身体や技術に関する解説を行い、その後の行動にもつながる授業へと発展していくことが望ましいのではないだろうか。

対象者の基本的属性の結果をみると、現在「みる」ために行う授業は生徒同士の発表会がほとんどを占めている。生徒同士の発表会ではたくさんあるダンスジャンルの限られた部分しか取り扱うことができず、その一部分についてもプロの作品を通した技術やその作品の背景を知ることはできない。またいくつかの学校では、ビデオや DVD の鑑賞も行われていることが明らかとなった。こうした教材を用いる際に、どのようなダンスジャンルにどのような解説を付けるべきか、本研究の結果からヒントを与えることで実施できるのではないだろうか。

本研究ではバレエを題材に行った。結果をスポーツ全体に拡大すると、「みるスポーツ」が「するスポーツ」の好感度や継続意図に影響することが示唆された。しかし、経験者に比べ、初心者にとって「するスポーツ」と「みるスポーツ」のあいだには隔たりがあり、「みるスポーツ」が直接「するスポーツ」に結び付きにくいことが考えられる。その隔たりを埋めるには経験を積んでいくことが必要である。さらに、より初心者の「するスポーツ」への態度・行動意図に影響する内容の解説も今後検討したい。経験者は解説内容のなかでも「するスポーツ」の経験によって共感することの出来る、技術・身体・選手といっ

た内容が「するスポーツ」「みるスポーツ」への態度に影響を与えると考えられる。スポーツをみることと同時に「するスポーツ」に生かすことの出来る楽しさを発見出来ているのではないだろうか。

第２節　今後の課題

本研究の限界として、鑑賞の場における実験条件の制約があげられる。解説群作成にあたり、因子数を強制的に 3 に設定したことや、反復測定のサンプルが経験年数別に分類すると数が少なくなってしまうことなどである。また、プロダクト構造の概念を用い 3 種類の解説内容が設定できたにも関わらず、2 種類の解説について本調査を行うこととなった。解説内容の違いにはこのほかにも様々なパターンが考えられ、今後他のスポーツへ発展させていくにあたり、課題としてあげられる。バレエは芸術として捉えられることが自然であり、「みるバレエ」を観戦として他のスポーツと同様に扱うのは困難であるともいえる。

さらに、研究の背景に中学校保健体育におけるダンス必修化をあげたが、中学校に実験的側面を持つ本研究を依頼することは、教育的観点から疑問が残る考え、大学生を対象に行うこととなった。本研究で示された結果をより明確に、さらに学校における保健体育からその先にある生涯スポーツまで視野に入れた研究であることを分かりやすく提示することによって、中学校など早い段階でこうした研究を実験的に行ってみたいと感じている。

分析の過程において、初心者と長期継続者を比較したが、長期継続者においては「するバレエ」と「みるバレエ」のこれまでの関わりを知ることはできず、「する」「みる」の関係性を明らかにするにはさらなる研究が必要である。それと同時にスポーツ参与形態の多様化に着目する必要もあるだろう。

引用・参考文献

・飽戸弘(1992)「コミュニケーションの社会心理学」㈱筑摩書房

・飽戸弘(1999)「売れ筋の法則」　㈱筑摩書房

・有馬昌宏(2008)「学生の実演芸術の鑑賞行動を規定する要因についての基礎的分析」文化経済学会

・有馬昌宏(2002)「文化経済学における実証研究の動向と課題」文化経済学 3(1)pp11-16

・上原信子(2002)「見るスポーツが高校生に与える影響：ワールドカップがもたらしたもの」研究紀要/東京学芸大学附属高等学校 Vol.40 pp73 -83

・江刺正吾「一流競技者の社会学」(1981)　道和書院

・海老原修(2004)「オリンピックとメディアの発達～スポーツ観戦からスポーツ鑑賞へ～」体育の科学 54(4)　pp380-384

・賀川昌明・石井源信・米川 直樹・岡沢 祥訓(1991)「スポーツのゲームにおける行動規範の研究 : 小学校体育授業における態度変容の実験的試み」鳴門教育大学研究紀要. 生活・健康編 6 pp 21-37

・金井明人・岩爪道昭・加藤雄一郎(2002)「広告修辞認知のマルチエージェントモデル」人文科学とコンピュータ研究報告 pp25-32

・神原直幸(2001)「メディアスポーツの視点」学文社

・川辺光(1981)「わが国一流競技者のスポーツへの社会化に関する研究 : その 1. 直接スポーツ参与に影響をおよぼす社会的要因分析」東京外国語大学論集 (Area and Culture Studies) no.31 pp149 – 173

・川口晋一(1990)「テレビのスポーツ中継視聴者の充足様態に関する研究」体育スポーツ社会学研究 9pp79-99

・川村洋次(2007)「高校映像の技法・修辞と効果に関する研究」認知科学 14(3), 409-423.

・川村洋次(2005)「広告映像技法・修辞に対する視聴者反応の解釈的分析」商経学叢第 52 巻 2 号 pp271-285

・小泉昌幸・伊藤巨志 (2004)「大学生のスポーツ行動の価値意識に関する一考察」新潟工科大学研究紀要 9　pp107-112

・笹川スポーツ財団 (2006)「スポーツ白書～スポーツの新たな価値と可能性～」

・佐伯聰夫（1999）スポーツ観戦論序説--問題の所在と観戦文化論の可能性（特集 スポーツ観戦論〜スポーツを<見る・視る・観る>を考える〜）体育の科学 49(4)pp 268-273
・篠田邦彦(2001)「スポーツの固有価値の享受能力に関する一考察―スポーツ鑑賞能力育成のための情意領域と経験領域―」スポーツ教育学研究(20)pp141-146
・篠田潤子(2007)「スポーツとメディア」㈱ブレーン出版
・杉本徹雄(1997)「消費者理解のための心理学」福村出版株式会社
・高橋和子(2008)「なぜ今ダンス必修化なのか」体育科教育 2008（3）pp20-23
・田窪正則(2009)「SPSS で学ぶ調査系データ解析」東京図書株式会社
・徳永幹雄・金崎良三・多々納秀雄・橋本 公雄・菊 幸一（1989）「スポーツ行動の継続化とその要因に関する研究(2) ： 大学生の場合」健康科学 11 巻 pp87-98
・時本識資(2004)「「する」「みる」「ささえる」「知る」スポーツから」体育科教育(52)pp34-37
・友添秀則(2004)「スポーツの楽しさを保障する体育の授業づくりの意義－「行う」「見る」「支える」「知る」楽しさから－」体育科教育(52)11 pp18-21
・中村恭子・武井正子・浦井孝夫(2003)「ダンス教育の目標に関する研究一高等学校のダンス教員の評価に基づいてー」順天堂大学スポーツ科学研究第 7 号 pp75-79
・中村恭子(2009)「中学校の男女ダンス必修化の課題―中学校教員を対象とした調査にもとづいて―」順天堂スポーツ科学研究第 1 巻第 1 号 pp27-39
・橋本良明編著(1999)「映像メディアの展開と社会心理学」㈱北樹出版
・林直也・原田 宗彦・Jo Lee Tea・Chon Tae Jun・Won Lee Chul(2004)「W 杯の観戦が日本と韓国における中学生のサッカー行動へ与える影響に関する研究 ：「みる」スポーツと「する」スポーツの関連に着目して」大阪体育大学紀要 35 pp1-13
・深澤弘樹(2010)「スポーツ実況中継における「物語」一全国高校サッカー選手権決勝を例にー」経営情報学論集
・古谷仁志・北原格・亀田能成・大田友一(2006)「視点に依存した微小面群モデルによるスポーツシーンの自由視点映像生成」第２回デジタルコンテンツシンポジウム講演予稿集
・松尾太加志・中村知靖(2002)「誰も教えてくれなかった因子分析」㈱北大路書房
・宮本乙女(2005)「創作ダンス授業における学習者によるパフォーマンス評価の研究」お茶の水女子大学紀要 34 巻 pp65-86
・三尾忠男(1997)「映像教材の構造記述カテゴリーの開発と映像情報の多重性の検討」 日本教育工学会論文誌 21(2)pp129-141

・文部科学省ホームページ　http://www.mext.go.jp

・吉田裕子・川口千代(1998)「ビデオ鑑賞によるダンス学習の効果」日本体育学会大会号(49)　pp614

・柳沢和雄・八代勉・中尾健一郎(1998)「フィットネスクラブのプロダクト構造と顧客満足の規定因」筑波大学体育科学系紀要 21　pp87-98